

# jdzb echo

## 地球温暖化問題とイノベーション

薬師寺 泰蔵・総合科学技術会議 議員

京都議定書の第一約束期間を迎え、地球温暖化問題に関する議論が世界的に活発となってきた。日本は本年7月に北海道洞爺湖でG8サミットを開催するが、その主要議題は環境・気候変動問題である。

日本は既に世界全体の温室効果ガスの排出を2050年までに半減するという目標を内外に表明している。地球温暖化問題を根本的に解決するには、フローとしての温室効果ガスの排出を大幅に低減し、ストックとしての温室効果ガスの大気中濃度を安定化させる必要があるのは論をまたない。

地球温暖化問題については、短中

期的対策と、中長期的な対策の両面を念頭に置き、経済と環境の両立を目指して戦略的に対策を進め、低炭素社会への転換を早急に図る必要がある。その鍵を握るのは温室効果ガスの排出を抜本的に削減する革新的な技術の開発・普及であり、今後、革新的な技術が新しい産業構造を作り、新しい富を国家と世界にもたらすと私は信じている。日本は、環境エネルギーにかかわる革新的な技術の開発・普及で世界をリードし、経済を支えると同時に、産業構造の転換を促し、貢献していくという新たな改革を世界に提言していくべきである。すなわち、温室効果ガスの抜本的な排出削減を進め、低炭素

社会へと転換していくイノベーションの創出と発信が強く求められている。具体的に見ていこう。

短中期的(2030年頃まで)には、既存技術のさらなる向上と、社会への普及が重要である。すなわち、削減効果の大きな技術について一層の性能向上と低コスト化を図ること、また、個々の機器にとどまらず住宅やオフィス、交通機関やライフラインを含む地域レベルでのエネルギー効率向上を図ることが重要である。日本は高効率火力発電、高効率ヒートポンプなどをはじめとする世界トップクラスの技術を有しており、世界をリードすることが期待されている。



ベルリン日独センターとドイツ産業連盟(BDI)の共催による日独シンポジウム『技術戦略マップ——イノベーションマネージメントと知の移動』(2008年4月22日、ハノーファー・メッセ・国際産業技術見本市内で開催)において開会の挨拶を述べる中野正志経済産業副大臣。

### 目次

地球温暖化問題とイノベーション 薬師寺泰蔵	1~2
編集後記 久米邦貞総裁	2
会議報告「学術図書館の 将来展望および発展」	3
交流事業 日独若手研究者交流	4
データ更新アンケート	5
事業報告	6
2008年事業計画	7
『一般公開の日』	8

他方で、既存技術の向上と普及のみで温室効果ガスの排出半減を達成することは不可能であり、中長期的(2030年頃以降)には、排出を究極的にゼロに近づける革新的な技術の実用化が求められる。具体的には、第三世代の太陽電池や次世代軽水炉、高速増殖炉などであり、抜本的な排出削減を実現するものとして期待される。さらに、超長期的(2050年以降)に実用化が期待される技術、具体的には核融合や宇宙太陽光発電などについても、長期的な研究開発を戦略的に推進していくことが重要である。

どんな革新的な技術であっても、社会に受け入れられなければ価値がなく、技術開発と同等またはそれ以上に普及策が重要である。普及には国の政策が大きく影響する。特に環境エネルギー技術は、市場に委ねるだけでは普及を期待しがたい場合が少なくなく、経済的なインセンティブの付与が必要である。また、国民の意識を変えていくことも重要であり、温室効果ガスの排出量を「見える化」することなどにより、国民一人一人が低炭素社会へ向けてライフスタイルを変えていく基盤を整備することも必要である。

地球温暖化問題は世界規模での取り組みが必要であり、以上の取り組みを世界に広げていくことが、日本に期待されている。全ての国が多様なアプローチで温室効果ガスの排出削減に取り組めるように、日本の優れた環境エネルギー技術やその普及策を世界に展開していくことが重要である。特に、開発途上国に対して技術の普及および移転を図ると同時に、開発途上国自身の問題解決能力の向上を支援することが必要であり、これは開発途上国も含めた経済と環境の両立を実現する上できわめて重要である。併せて、開発途上国における削減を資金的に支援することにより先進国での削減枠を上積みするといった取り組みにつ

いて、資金メカニズムの観点から基盤整備を図っていくことも重要である。

折りしも、日本では、福田内閣総理大臣の指示による「環境エネルギー技術革新計画」の策定が行なわれているところであり、その策定グループの座長を私が務めている。同計画は、温室効果ガスの抜本的な排出削減に向けたイノベーションの今後の進め方を示す国家的な計画であり、この記事の皆様がご覧になる頃にはとりまとめ・公表されているはずである。この計画には、多くの委員の意見を得て、以上に述べた考え方を具体的に盛り込んでいる。今後、日本の環境エネルギー技術政策が本計画を基に発展し、地球温暖化問題の解決に向けて大きく寄与することを願っている。

ドイツは、日本と同じく優れた環境エネルギー技術を有している。ドイツと日本が協力することによって、世界的に貢献のできる環境エネルギー・イノベーションを創出できれば素晴らしい。競争による技術の高度化と、協調による新たな技術の創出・普及が、世界から求められている。



薬師寺泰蔵慶応大学客員教授  
総合科学技術会議議員、日独フォーラム・メンバー

『jdzbecho』読者の皆様

ベルリン日独センターでは、日独間の対話と協調をとくに強化すべき重点分野として、国際社会の中で日独両国が協力して取り組むべき重要課題、及び両国が夫々の国内で抱えている共通の社会問題の二つの分野を掲げています。とりわけ、本誌の冒頭で薬師寺教授が取り上げておられる「地球温暖化とイノベーション」の問題は、この分野で世界をリードする技術力を有する日独両国が共同して取り組むべき現下の最優先課題と言えます。ドイツが議長国となった昨年のハイリゲンダムG8サミットに続き、本年7月には、日本の議長の下で北海道洞爺湖サミットが開催されることは、この分野で日独が緊密に協力する上で格好の機会を提供するものです。

この機会を捉えて、この分野での日独間の幅広いレベルでの対話を促進すべく、当センターでは昨年来種々の企画を進めてきています。フリードリッヒエーベルト財団及び富士通総研との共催でこの6月末に東京で開催されるエネルギー及び温暖化政策に関する会議も、そうした企画のひとつです。本誌にTrümper氏による報告が掲載されている今年3月のドイツの若手研究者の訪日プログラムでも、この分野が取り上げられ、次世代を担う両国の若手研究者間の相互理解の増進が図られました。

温暖化や、エネルギーの分野では、技術面では、日本もドイツにとって刺激となる優れた技術を有していますが、幅広い国民層の問題意識や、税制をはじめとする各種の制度面では、日本は未だ多くをドイツから学ばねばならず、当センターの企画が今後少しでもこの分野での両国間の対話と交流の強化に寄与することを願うものです。

久米邦貞、ベルリン日独センター総裁

#### jdzbecho

ベルリン日独センター広報紙『jdzbecho』は四半期毎(3月、6月、9月、12月)に刊行されます。

発行: ベルリン日独センター(JDZB)  
編集: ミヒャエル・ニーマン  
E-Mail: mniemann@jdzbe.de

本紙『jdzbecho』はPDF版をホームページからダウンロードすることも、eメールでの定期購読も可能です。

#### 連絡先:

Japanisch-Deutsches Zentrum Berlin (JDZB)  
Saargemünder Strasse 2, 14195 Berlin, Germany  
Tel.: +49-30-839 07 0 Fax: +49-30-839 07 220  
E-Mail: jdzbe@jdzbe.de URL: http://www.jdzbe.de

ベルリン日独センター図書室の開室時間は火曜日～木曜日午前10時～午後4時です。

友の会連絡先: freundeskreis@jdzbe.de

## 日独シンポジウム『学術図書館の将来展望および発展』およびワークショップ『欧州日本資料図書館における日本情報検索のノウハウ』に参加して

根本彰

東京大学大学院教育学研究科教授



このたび、ベルリン日独センターで開かれたシンポジウムとワークショップ(2008年2月28日)に参加して感じた二つのことについて書いておきたい。

一つは、ドイツと日本における図書館の位置づけの違いである。シンポジウムでは、それぞれの学術図書館の現状と図書館員養成の現状についての報告が行なわれた。また、二日後にはベルリン国立図書館の見学が行なわれ、さらに個人的にいくつかの図書館を見学することができた。それらからの大雑把な把握にすぎないのであるが、ドイツという国は「学術」が社会に根差し、日常生活から連続的に連なっているという感じがした。そしてその連続性を保証するためのインフラストラクチャーとして、大学だけではなく図書館や博物館などの文化施設があるということである。

日本の学術はかつて学者の玩具とされ、現在はそれではいけないということで「役に立つ」ことが喫緊の課題とされる。いずれにおいても研究者・大学教員のためのものであって、学術を社会全体のものとする努力が不足している。大学の地域貢献や社会貢献が言われ、大学図書館の地域公開も行なわれているが、ドイツの学術図書館が多額の予算と博士号をもった専門職員を配置してこれを社会に公開しているのを見ると内実ともにスケールが違うと感じた。

とりわけ資料集積の広さと厚みにおいて格段の差があると思われる。ドイツの図書館は300年からの歴史があるものも珍しくなく、また、資料は単に自国市場で流通する出版物を収

集するだけでなく、手書き資料から、楽譜、地図、外国のものまでを広く集めている。こうした蓄積が文化・学術のもっとも基盤的な部分に働きかけることで、深く豊かな創造が可能になるのではないかと。日本文化と学術の薄っぺらさはインフラの欠如からくるのではないかと思われた。

もう一つは国際交流における図書館の位置づけである。

国際交流において図書館はきわめて重要な働きをすることは欧米における常識である。たとえば、19世紀以来、国際条約によって国と国とが政府刊行物を交換して、それぞれの政府の基本的情報を開示し合うことが行なわれてきた。また、国際機関の発行資料を加盟国に配布することも行なわれてきた。そうした資料は国立図書館や大学図書館でデポジットコレクションとして置かれることが一般的である。これは交通や通信の手段が今のように迅速で便利でなかった時代に必要であったものだが、紙に書かれたものを交換するのは証拠を残すという意味があるので現在でも行なわれている。

各国の政府機関が他の国に図書館を設置して当該国に関する基本的な情報を提供することも広く実施されてきた。日本でも第二次大戦後の占領期にC I E 情報センターと呼ばれた図書館が24都市に設置され、ここがアメリカに関するダイレクトな情報に接する場所として当時の日本人に大いに利用された。現在でも各国の大使館や関連の文化機関が数多く図書館を設置している。

今回、日本の情報をヨーロッパで積極的に伝えようとしている図書館員の

人たちの活動に触れることができて、たいへん興味を覚えた。ドイツ国内だけでなくパリ、チューリッヒ、オスロから駆けつけた人もいた。いずれも小さいワンパーソンライブラリーだということであるが、きわめて熱心に取り組まれている。また、日本人だけではなく、ドイツ人やオランダ人の図書館員も日本語でのワークショップに対応できる語学力をもって参加していた。

今回の議論から浮かび上がってくるのは、小さいながらもそれぞれがそれぞれの国における文化外交の拠点として重要な働きをしているということである。これを正当に評価し、日本の図書館政策や文化外交政策と結び付けて議論することが必要である。これは一点目ともかわかることで、日本でも図書館の役割を再度評価しなおすことが必要であろう。今回のシンポジウムおよびワークショップの機会に、こうした問題を議論する国際ネットワークを作ることを提案したい。

最後に、今回のようなめったにない議論の場を設け、ご招待くださったベルリン日独センターと国際交流基金の関係者、およびスタッフの皆さん、とりわけ、ベルリン日独センターで18年にわたり図書室の維持管理を行ない、今回の企画の中心になった桑原節子さんに感謝申し上げたい。

### 参考文献

根本彰「交流の場図書館：日本での可能性」、『国際交流』103、2004年4月、p. 65-70。

## “Junior meets Senior” – 実験室と寺院での学術交流

革新的エネルギーおよび二酸化炭素排出削減部門における日本最高峰の研究所を視察したドイツ人若手研究者の報告

ゼーレン＝クリスティアン・トリュンパ

PLANETエンジニア事務所オルデンブルグ、水素セル・燃料セル事業部および政策分析部

「おはようございます」——日本の朝は、この挨拶で始まる。日本国外務省に招待されて十日間の日本研修旅行に参加したドイツ人六名の一日は、毎朝早く始まった。

六名は、ベルリン日独センターが日本国政府より委託され、資金拠出を得て企画・実施する『若手研究者招聘プログラム』で日本を訪問した。本プログラムが対象とするのは官民の研究所に勤める青年研究者だが、なかでも2008年度は地球温暖化防止・エネルギー部門の研究者が募集された。地球温暖化防止は、今や世界的規模で関心が持たれるテーマであるが、新エネルギーの創出はこれと密接にかかわる課題である。選抜され日本に派遣された六名のドイツ人研究者は、化学産業、再生可能エネルギー、政策顧問機関など異なる分野に従事するが、日本で最前線に立つ研究者と出会い、討議し、互いに日独間の共通点や相違点を確認する機会を得た。

日本滞り期間中は連日様々な公式日程がつづいた。地球温暖化防止・エネルギー部門に従事する日本の主要機関の活動を理解することを目的に、産業技術総合研究所(AIST)および国立環境研究所(NIES)等の公的研究機関だけでなく、東京瓦斯株式会社(世界第三位の天然ガス事業者)をはじめとする産業界の重要なステークホルダーの研究現場の視察も、日程に組みこまれた。

なかでも重点的に紹介されたのが、水素セルおよび燃料セル関連のテクノロジーである。燃料セルは熱効率が高く、多様な利用が可能のため、環境・資源に優し



いエネルギーのなかでも最も有望視されるエネルギーである。そのなかでも、様々な方法で創出可能な水素を資源とする水素セルには、温室効果ガス排出削減、多彩な利用方法、高い熱効率など様々なメリットがあり、再生可能エネルギーの普及に向けた大きな可能性が認められている。

日本は、車輻内に設置するような移動利用の固体高分子形燃料電池(PEFC)の領域では、ヨーロッパ・アメリカとならび世界のトップに立つ。しかしながら、燃料セルを用いた地域暖房用熱供給発電所をはじめとする固定利用、すなわち固体酸化物形燃料電池(SOFC)では、ドイツの研究が優位にある。そこで、本分野に関して日独の自然科学者間で活発な討議がみられた。

我われドイツ派遣団は、日本のテクノロジーだけでなく、研究政策にも関心があった。ドイツでは、欧州連合(EU)の政策が大きく影響し、エネルギー・環境保全に関しても欧州共同研究の土俵上で多くの技術戦略マップが作成され、きわめて具体的な目標が設定され、その達成に向けたスケジュールが組まれている。そこで、日本にも政府主導の長期的な研究政策が存在するか、同政策を国が助成しているか、といった点に興味があったが、先進産業界であり、世界第四の二酸化炭素排出国である日本が、環境保全とエネルギーに関する具体的な政策をほとんど有さないこと、少なくとも公表されている政策が僅かしか存在しないことを知り、きわめて不思議に感じた。かつて、ヨーロッパでは域内研究の結束性欠如が批判され、2000年にリスボン戦略を導入することで改善が試みられた

経緯があるが、今回の日本視察を通じて、日本のエネルギー・環境保全セクターにもかつてのヨーロッパと同様に、結束性が欠如するように見受けられた。二酸化炭素削減に向けたグローバルな努力への日本の参加可能性を示す唯一の包括的なプログラムが、安倍晋三首相が2007年に発表した「クールアース50」である。しかしながら、本プログラムはきわめて観念的なもので、目標年として2050年が掲げられるものの、削減目標値に到達する道程は、少なくとも我われドイツ派遣団の得た印象では、きわめて曖昧なものに過ぎない。

以上のように、全ての質問に回答が得られた訳ではないが、日本人研究者による温かい歓待や、社会文化視察の一環で訪れた印象的な名所など、多くの素晴らしい思い出を持ち帰ることができた。広大な寺院で静寂と精神性を学び、劇場や、定番のカラオケ体験など、日本の大都会のせわしない営みを垣間見ることもあり、早朝に始まった一日は、連日深夜までつづいた。

十日間の日本滞り中の最も貴重な成果として、多数の人々と出会ったことと、日本と日本人から得たポジティブな日本像を挙げたい。これらは、引きつづき日独間の知的交流を深め、拡大していくための基盤である。その意味において重要な挨拶で本報告を締めくくりたい。「アウフ・ヴィーダーゼーン(また、お目にかかりましょう)」

アンケート返送先: ファックス +49 (0)30 839 07 220、 Eメール: jdzbd@jdzbd.de、 または郵送:

Japanisch-Deutsches Zentrum Berlin  
EDV  
Saargemünder Strasse 2  
14195 Berlin  
Germany ドイツ

『jdzbd echo』読者の皆様

『jdzbd echo』をご愛読いただき、ありがとうございます。

ベルリン日独センターでは、情報発信の電子化を進めております。受信にご支障ない場合は、『jdzbd echo』を紙媒体からPDFファイルでのオンライン配信に切り替えさせていただきたいと思っておりますので、ご理解のうえよろしくご協力くださいますようお願い申し上げます。ベルリン日独センターのウェブサイトから、オンライン配信をお申し込みいただくことも可能です。また、『jdzbd echo』に掲載する「事業計画(抜粋)」の補足として、近々、向こう一ヶ月から三ヶ月に開催する公開事業を紹介する簡単な「事業案内」のメール配信開始を予定しております。ご希望の方は、是非メールアドレスをお知らせください。

なお、紙媒体の『jdzbd echo』の発行も従来どおり続けますので、ご希望の方はその旨ご回答ください。さらに、今後は購読をご希望にならない場合も、該当箇所に☒を入れて、ご返送ください。

ご回答に際しましては、本アンケート用紙に必要事項をご記入の上、2008年8月31日までにファックスあるいは郵送でご返信ください。Eメールでのご回答も受け付けます。

皆様のご理解・ご協力を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

Mr. / Mrs. / Ms.

ご芳名(漢字)

ご芳名(ローマ字)

ご所属機関名

『jdzbd echo』配送先住所

電話番号

ファックス番号

Eメールアドレス

- ・『jdzbd echo』pdfデータ版の上記アドレスへのオンライン配信を希望する はい
- ・『jdzbd echo』pdfデータ版のオンライン定期配信を既に受けている(または手配済み) はい
- ・『jdzbd echo』紙媒体の郵送継続を希望する はい
- ・『事業案内』のオンライン配信を希望する はい
- ・『jdzbd echo』の定期購読を希望しない はい



大塩紗永版画展『北斎の末裔たち』——写真は2008年5月9日の開会式における大塩紗永  
展示は2008年6月12日まで。観覧時間は月曜日～木曜日は10時～17時、金曜日は10時～15時30分



ドラマリーディング『父と暮せば』(2008年4月10日、ベルリン日独センター開催)——原爆投下後の広島を舞台にした井上ひさし作の戯曲を俳優のシングル(Jan Single)とヴェネカンプ(Christina Wennkamp)がドイツ語で朗読。



ドイツ連邦共和国政府の招聘で、ドイツの温暖化防止とエネルギー事情を視察中の日本の国会議員団が、ワーキングランチでドイツの専門家と意見交換(2008年5月5日、ベルリン日独センター開催)。写真は民主党副代表の岡田克也衆議院議員およびボッセ(Dr. Friederike Bosse)ベルリン日独センター事務総長



デュッセルドルフ市経済振興公社およびデュッセルドルフ商工会議所と共催した日独シンポジウム『日独企業のアジア戦略——アジアはパートナーかライバルか』(2008年3月4日、デュッセルドルフ開催)



会議『知識の国際的関係を考える』(2008年3月13日、ベルリン・ブランデンブルク学術アカデミー開催)。写真前列右から:ザイフェルト教授(Prof. Dr. Wolfgang Seifert、ハイデルベルク大学)、三島憲一教授(Prof. Dr.、東京経済大学)、日地谷キルシュネライト教授(Prof. Dr. Irmela Hijija-Kirschnerreit、ベルリン自由大学)

## 会議系事業(重点領域別)

### 国際社会における日独の共同責任

国際会議『メドゥーザを支配する——グローバル・ガバナンス——日本、米国、英国、ドイツのアプローチの比較』

協力機関:ベルリン自由大学、東京大学  
開催予定:2008年12月11日~12日

日独会議『開発協力における日独のグローバルな責任——異なるアプローチ、共通の利害関心』

協力機関:コンラート・アデナウア財団(ベルリンおよびボン)  
開催予定:2008年12月中旬

### 天然資源、エネルギー、気候変動、環境

日独シンポジウム『エネルギーと気候保全に関するグローバルな安全保障問題』

協力機関:フリードリヒ・エーベルト財団(ベルリンおよびボン)、富士通総合研究所(東京)  
開催予定:2008年6月30日、東京開催

### 少子高齢化社会

日独シンポジウム『家族政策』

協力機関:筑波大学、マックス・プランク学術振興協会所属外国社会法・国際社会法研究所(ミュンヘン)  
開催予定:2008年11月13日~15日  
東京およびつくば開催

### 学術振興

日独ワークショップ『日独の持続可能な開発のための社会科教育』

協力機関:ドイツ学校地理協会(ベルリン)、日本地理科学学会(広島)、広島経済大学  
開催予定:2008年8月19日~21日

### 国家、企業、市民社会

日独シンポジウム『日本とドイツにおける市民社会——概念と実践』

協力機関:ハレ・ヴィッテンベルク大学  
開催予定:2008年10月9日~10日、ハレ開催

日独ワークショップ『エコデザイン』

協力機関:国際デザインセンター(ベルリン)、国際デザインセンター(名古屋)、在日ドイツ商工会議所(東京)  
開催予定:2008年10月末、東京および名古屋開催

シンポジウム『労働の国際化——学問と経済の出会い』——ドイツ学術交流会プログラム『日本語学習と企業内研修』25周年記念  
協力機関:ドイツ学術交流会(東京)  
開催予定:2008年10月16日、東京開催

### 文化間の対話

『第9回日独韓奨学生セミナー』

協力機関:ドイツ学術交流会(ボン)  
開催予定:2008年7月10日~11日

国際シンポジウム『日本のアニメ』

協力機関:国際交流基金(東京)  
開催予定:2008年10月30日~31日

日独会議『東アジアにおけるドイツのソフトパワー——過去および未来』

協力機関:大阪大学  
開催予定日:2008年11月21日~22日  
京都または大阪開催

### 特別事業

『日独フォーラム第17回全体会議』

開催予定日:2008年11月25日~26日

## 日独人的交流事業

若手研究者招聘プログラム

協力機関:日本国外務省(東京)、ドイツ連邦教育研究省(ベルリン)、ドイツ連邦経済技術省(ベルリン)  
実施予定期間:2008年6月5日~16日(日本代表団訪独)、ワークショップは6月14日

2008年度(ヤングリーダーズ・フォーラム)

協力機関:ロバート・ボッシュ財団(シュトゥットガルト)  
実施予定期間:2008年7月20日~30日

以下の交流事業は

<http://www.jdzb.de> --> 人的交流事業で御覧下さい:

- ・研修プログラム『日独青少年指導者セミナー』
- ・日独勤労青年交流プログラム
- ・日独学生青年リーダー交流プログラム
- ・日独高校生交流『たけのこプログラム』

## 文化事業

### コンサート

『桜アンサンブル』とゲスト

開催予定日:2008年6月21日、午後7時30分

12月ダーレム・ムジークアーベント:

『クリスマスコンサート』

### 展覧会

大塩紗永版画展『北斎の末裔たち』

展示期間:2008年6月12日まで

ユリア・バイヤー写真展

『ヨーロッパの公共プールと日本の銭湯』

オープニング:2008年6月21日、午後7時  
観覧時間は月曜日~木曜日10時~17時、金曜日10時~15時30分。  
展示期間:2008年9月5日まで

写真と解説による人物紹介展『佐野エンネ——草の根交流のパイオニア』

オープニング:2008年11月7日  
展示期間:2009年1月16日まで

ベルリン日独センター『一般公開の日』

開催予定:2008年6月21日  
(8ページを御覧ください)

### その他

伊藤比呂美対談会『詩における過激性——日本の現代詩』

協力機関:ベルリン・ポエジーフェスティバル  
開催予定:2008年7月7日、午後5時、ベルリン芸術アカデミー開催

書道教育ワークショップ

協力機関:教育書道会(ハンブルク支部、ケルン支部、ベルリン支部)  
開催予定:2008年7月17日~18日

掲載の行事のタイトルが英語で挙げられているものは英語で開催、そのほかのものはドイツ語で開催(一部日独または日英の同時通訳付)します。

会場については、ほかに記載のない場合はベルリン日独センターで開催します。

詳しくは<http://www.jdzb.de>-->各種行事



(C) FUJIKO-PRO, SHOGAKUKAN, TV ASAHI, SHIN-EI ANIMATION, ASATSU-DK 2006

## プログラム

午後2時から  
 生け花のデモンストレーションと作品展示  
 折り紙講座  
 習字講座  
 日本語体験講座  
 指圧デモンストレーション  
 書籍市(日本語書籍、日本関連ドイツ語書籍)  
 屋台(寿司、天ぷら、蕎麦、飲み物)

午後2時30分、4時45分  
 劇映画『ドラえもん のび太の恐竜2006』

午後3時、3時45分、4時30分、5時15分  
 ワークショップ『マンガを描こう』

午後3時45分から4時30分まで  
 ベルリン日独センター建物案内(建築・歴史)

午後7時  
 ユリア・バイヤー写真展オープニング  
 『ヨーロッパの公共プールと日本の銭湯』

午後7時30分  
 コンサート『桜アンサンブル』とゲスト

※出し物等は一部変更することもあります。あらかじめご了承ください。

本年3月に「アニメ文化大使」に就任したドラえもんの劇場版映画「ドラえもん のび太の恐竜2006」を上映します。ケルン日本文化会館と共催のドイツ初公開です。どうぞふるってご来場ください。

## ユリア・バイヤー写真展

### 『ヨーロッパの公共プールと日本の銭湯』

写真家ユリア・バイヤーにとって、プールは「原初的な存在の場」である。2002年にはドイツの公共プールを題材とするモノクロ写真シリーズ『公共水浴施設』を制作し、翌年のフリーランス・フォトデザイン連盟(BFF)奨励賞を受賞した。2005年には、これにつづくモノクロ・シリーズ『銭湯——日本の公衆浴場』が完成した。



ユリア・バイヤーは水ないしは湯につかる人々、泳ぐ人々、くつろぐ人々を撮るだけでなく、それら人々の背後にある物語を写し出す。そしてまた、公の場でありながらきわめて私的な空間でもある「浴場」の特徴を、鮮明に描き出す。

この二つのモノクロ写真のシリーズから作品を選び出した本展覧会では、アジアとヨーロッパの「公共浴場」文化の比較も堪能できる。

ユリア・バイヤー(1971年生まれ)は1998年からフリーランスの写真家として、新聞、雑誌、エージェントなどに作品を提供している。